

協同学習と実践体験を通して高められる教職への意欲

—教育実地研究6組の活動を例に—

教育学研究科

中嶋 俊夫

1. はじめに

本学部学校教育課程1年必修科目「教育実地研究」は、専門的な教科指導や教育実習を経験する前に、学生が学校現場について体験的に理解を深めることを目的としている。平成13年度から本授業を担当しているが、筆者のクラスでは特に、大学生と児童が表現活動を通して交流する場を大切にしてきた。このような活動の場は、学生が児童との人間関係づくりを体験し、児童の学びを支援できるようになるために有効であると認識している(中嶋2007, 2013)。

さて、教育実地研究のクラスでは15回の授業を通して、大学での講義や討議、教育現場での観察参加、授業計画・実践など様々な活動を行うが、学生20人という単位で構成されるクラスにおいて、個と個、個と集団の相互関係のあり方が学びの質に影響を与えらると思われる。この点に課題を見出し、本稿では1クラス20人の集団が教育実践の場と向き合い、教職に対してどのように意欲を高めていけるか、その可能性について考察していきたい。

2. 平成25年度「教育実地研究」6組の授業内容

平成25年度秋学期「教育実地研究」1年6組の授業日程と学習活動は下記のとおりである。

*は附属学校等で活動

日程	活動内容
10/4	クラスでのオリエンテーション/大学生と附属小学校児童の交流の様子(DVD)
10/11	授業観察の視点と方法
10/18	*附属鎌倉小学校授業観察 (2年1組・4年2組、午前中4時間)

10/25	*附属鎌倉中学校合唱祭参観 (於、鎌倉芸術館)
11/1	観察した授業や活動についての討議
11/8	エピソードを語る1
11/15	エピソードを語る2
11/22	表現活動を取り入れた授業の構想1
11/29	表現活動を取り入れた授業の構想2
12/6	*附属鎌倉小学校授業観察 (2年1組・4年2組、午前中4時間)
12/13	*附属鎌倉小学校全校音楽会参観 (於、鎌倉芸術館)
12/20	観察した授業や活動についての討議
1/10	授業づくり準備
1/24	授業づくり準備
1/31	*附属鎌倉小学校授業観察・実践 (2年1組・4年2組、午前中4時間、学生による授業1時間を含む)
2/7	附属学校での活動から学んだこと

本授業の活動は次の(1)～(3)の3つの局面から構成されている。

(1) 附属小・中学校での授業観察および行事などの参観

①附属鎌倉小学校における3回の授業観察

学生20人は10人ずつ、2班(A・B)に分かれ、A班は4年2組(佐藤知司教諭担任)で、B班は2年1組(三野浩一教諭担任)で継続的に授業を観察。

②附属鎌倉小・中学校の音楽行事参観

中学校の合唱祭、小学校の全校音楽会を参観。

平成 25 年度は附属鎌倉小学校校舎が改修中であり、一つの教室に学生全員を収容できないことを考慮して 2 つの学級に分かれたが、例年 20 人単位で活動していた時と比べると、10 人単位で活動する方が学習効果は高まると感じられた。10 月 25 日と 12 月 13 日には音楽行事に参加し、児童生徒の音楽表現の実際に触れた。子どもの主体性や表現技能、行事運営などの観点から学校における音楽活動の意味を学び、何よりもクラスが一つになって歌い奏でる、子どもたちのその姿に感動したことが学生の事後の感想文から読み取れる。2 つの音楽会を通して小学生と中学生を比較しながら、学生たちは 9 年間の子どもの成長を捉えることができたようである。

(2) 観察した授業や活動についての討議

授業観察を行った次の週に各自が作成した観察記録を持ち寄り、観察の対象として選んだ授業科目ごとに少人数のグループに分かれて討議を進めた。その後、指導法や学習内容、子どもの個性や個人差、教師と児童の関係性についてクラス全体で課題を共有した。

(3) 授業計画・実践

授業観察の最終日（1 月 31 日）に、配属された学年・学級で学生たちは授業（1 時間ないし 2 時間分）を行った。授業計画にあたっては、観察してきた授業や子どもの学習の様子から得られた情報を基に、学生たちはグループで話し合いながら学習活動の内容を精選していった。前段階として 11 月 22 日と 29 日には、「表現活動を取り入れた授業の構想」という課題にしたがって各自が考えた授業計画案（一人一案）を大学のクラスで発表している。このとき各々の計画案に対して互いにコメントや評価をした経験は、授業計画において生かされたようである。具体的な実践内容については 3 で述べる。

3. 学生による授業実践

附属鎌倉小学校での観察・参観の最終日に、学生たちはそれぞれ配属された学級で授業を行った。授業内容は、筆者が提示した「表現活動を生かした授業づくり」の条件に沿って計画されている。この条件には、教科を問わず、授業の様々な場面において、子どもの表現力を引き出しながら効果的に学習が進められるということを体験させたいというねらいがある。

附属鎌倉小学校では各学級それぞれ特色のある教育活動に取り組んでおり、それがクラスの独自性を育て、学級経営や学習において成果を上げている。4 年 2 組では

演劇活動に力を入れており、児童たちは演じることが得意である。一方、2 年 1 組では児童たちはものづくりにも積極的に取り組んでいる。学生たちはこのようなクラスの特性を生かして題材を選び、次に示されるように授業を計画し、実践した。

『4 年 2 組配属の A グループ学生による授業』

【テーマ】

「身体で表現しよう」

【活動場所・日時】

附属鎌倉小学校 体育館

平成 26 年 1 月 31 日（金）2 校時

【目標】

①与えられた言葉から動きを想像し、創作にむけて発想力を養う。

②身体の動きで表現し、見ている人に伝える力を育てる。

【内容】

床に散らばっている「言葉かるた」をめくり、書かれている言葉を身体で表現する。その後グループに分かれ、テーマが提示される。そのテーマから自由に発想を広げて、連続した動きを創作し、発表する。



4 年 2 組の授業「身体で表現しよう」

『2 年 1 組配属の B グループ学生による授業』

【テーマ】

「自分たちだけの空気砲をつくろう！」

【活動場所・日時】

附属鎌倉小学校 家庭科室

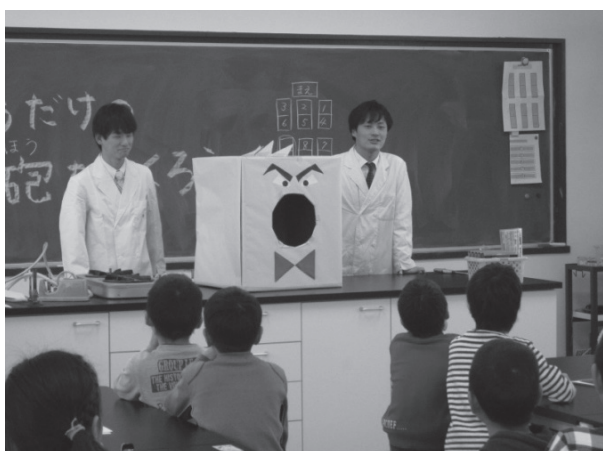
平成 26 年 1 月 31 日（金）3・4 校時

【目標】

- ①グループ（4 人）で 1 つのオリジナルの空気砲を作る。
- ②空気砲を楽しみながら空気の流れを知る。

【内容】

- ①段ボール空気砲の側面に貼る画用紙に児童が絵を描いたり、折り紙を貼ったりする。その画用紙を段ボール各面に貼り、班で 1 つの空気砲（作品）を完成させる。
- ②空気砲の中に線香の煙を充満させ、空気砲を使用したときの煙の形（空気の流れ）を知る。
- ③空気砲を使ったゲームを行う。



2 年 1 組の授業「自分たちだけの空気砲をつくろう！」

上記 2 つの授業計画案では【学生の役割分担】【事前準備】【授業の展開】について記入されているが、本稿では省略する。

4. 学生の授業実践の成果

自分たちが行った授業を振り返って、一人の学生は次のようにコメントしている。

「授業終了後に児童が楽しかったと言ってくれたことがとっても嬉しかった。学生みんなで試行錯誤しながらつくりあげた授業だったので、ものすごい達成感を感じ、自信にもなった。」

教育実地研究のクラスには「学外活動」に参加して子どもとの関わりを経験している学生もいるが、学級や授業といった枠組みにおいて、ほとんどの学生は、このとき初めて授業づくりを体験したことになる。

2 つのグループがそれぞれの学級で授業をした際、どちらのグループも図 1 にみられるフォーメーションを採っている。

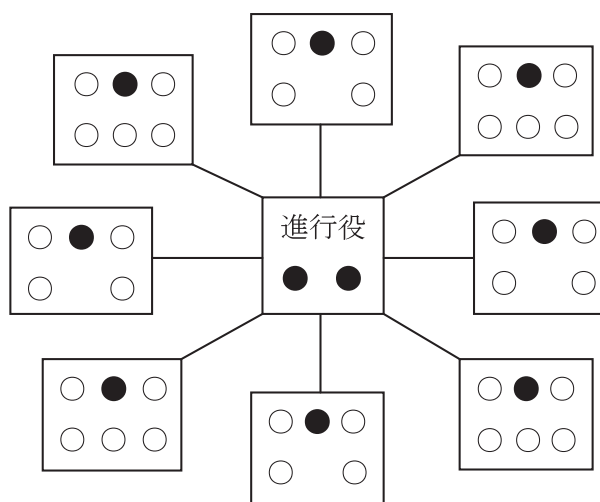


図 1 ○は児童 ●は大学生

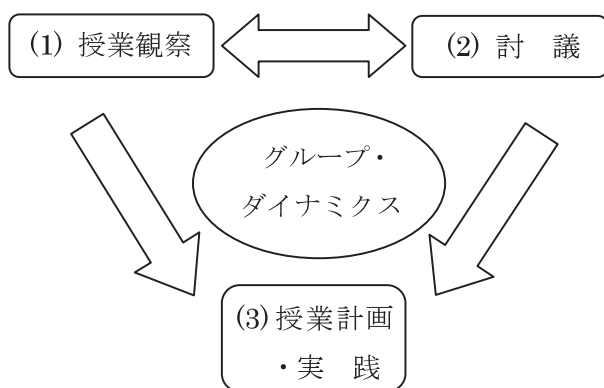
この体制において、授業の考案者でもある 10 人の学生は連携を図りながら、時にはファシリテーター、時には児童と同じ班員となって学習活動を進めた。班の児童と一緒に活動した成果を個々の学生が自分の成果として受けとめ、さらに授業の成果が学級全体と 10 人の学生の間で共有される構図になっている。この成果は、想像以上に子どもたちの表現力や学習意欲を引き出したという感動をともなって、成功体験として共有された。またまた A・B 2 つの学生グループが互いの授業を観察し、比較することができたことは、本活動の意味をさらに高めたといえるだろう。

5. グループ・ダイナミクスの効果

筆者は、20 人の学生たちの人間関係のあり方が教育実地研究の授業成果に反映すると考えている。平成 25 年度のクラスの場合、2 つのグループに分かれて 10 人が協同して授業づくりに臨んだ。互いに意見を出し合いながら題材や目標、活動内容を選定し、役割分担や準備を進め、質の高い成果につなげるためには、グループ内で目的意識や価値観が共有される必要がある。

K. レヴィンらの「グループ・ダイナミクス」の考え

方によると、力動的全体として捉えられる集団において、集団を構成するメンバーの間で相互作用があり、メンバーと集団は相互依存関係にあるという（本間 2011, pp. 7-9）。グループ・ダイナミクスは、教育実地研究のような参加型、あるいはアクティブ・ラーニングの形態を採る規模の小さいクラスの活動において有効に働くであろう。そうすると教育実地研究の場合、20人のクラスの活動が良い成果を生み出すことによって、教職に対する学生一人一人の価値観は高まるといえるのではないだろうか。



15回の授業の中で「エピソードを語る」（11月8・15日）という課題を取り入れている。これはクラスの構成員が一人ずつ話題を選んで5分程度の話をし、それに対して聞き手がコメントするという活動である。その目的の一つは、児童生徒の前で話ができるようになることであるが、もう一つ、「語る－聞く－共感する」を通してクラスの間関係を深めたいという意図がある。話の内容、話し方や表情から、話者の性格や考え方がどういものであるか聞き手は受けとめ、共感しようとする。時にはその人の人生観や信念に触れることもあり、ある意味でこの活動は、グループのメンバーとなるためのイニシエーションの役割も果たしている。学生たちはただ仲良ししているのではなく、互いの考えをしっかりと受けとめ、生産的に話し合いを進められる集団になるために有効な活動として、筆者はこの「エピソードを語る」を位置づけている。グループ・ダイナミクスという観点からこのような人間関係づくりは大切であると考えている。

6. 協同学習の意義

E. バークレイらは、協同学習 (Collaborative Learning) を「仲間と共有した学習目標を達成するため

にペアもしくは小グループで一緒に学ぶこと」(E. バークレイ 他, 2009, pp. 3-4) と定義し、「グループの参加者がグループの目的に向かって共に積極的に活動する必要がある」(ibid. p. 4) と捉えている。そして、望ましい協同学習グループの本質と考えられる5つの原則を次のように提示している (ibid. p. 8)。

i. 肯定的相互依存

個人の成功はグループの成功と結びついている。グループが成功すると個人も成功する。学生はグループ目標を達成するためにお互い助け合うことに動機づけられている。

ii. 促進的相互交流

学生は互いに積極的に助け合うことを期待されている。メンバーは学習資源を共有し、学ぶために互いの努力を認め、励まし合う。

iii. 個人と集団の責任

グループはその目的達成に責任がある。メンバーはグループ活動に貢献する責任がある。個人は個別にも評価される。

iv. 集団作業スキルの発達

学生は専門的な内容（学習課題）を学ぶことが求められている。同時に、グループのメンバーとしてうまく活動するために必要とされる対人関係スキルや小集団スキル（チームワーク）も獲得することが求められている。これらチームワークに必要なスキルは「アカデミックなスキルと同様、意図的に正しく」教えられなければならない。

v. グループの改善手続き

学生はグループの成果を評価することを学ぶ必要がある。メンバーのどの行為がグループに役立ち、どの行為が役立たないのかを明らかにし、どの行為を続け、どの行為を変えるべきか明確にする必要がある。

これら5つの原則は、前節で言及したグループ・ダイナミクスと関連して、教育実地研究の授業活動のあり方の指針になると考える。

7. まとめにかえて

最後に教育実地研究クラスの学生のレポートから引用しておきたい。教員養成に携わる一人として、個々の学生の変化や成長を受けとめながら、教員志望の実現に向けてどのように支援していけばよいか、本稿を通して改めて問いかけたいと考える。

◎附属鎌倉小学校における4回の参観・参加を振り返って…

「小学校の先生になりたい！」という思いから、この大学に入学したものの、実際のところ今期に至るまで小学生と関わるといった機会はありませんでした。今回の実地研究を通して、4回も生の教育現場に触れたことで、子どもたちと一緒に時間を過ごすことの楽しさを体感し、最後の方には自分の中での教師になりたいという思いが強くなってきたのを実感しました。(中略)

最後の実地研究で、私たちが表現活動の授業を企画したわけですが、数回の授業見学を通して様子を観察していたので、どんな子どもたちが揃っているクラスなのか大体把握したうえで授業の組み立てや、構想を練っていくことができました。そのお蔭で、本番は児童の顔から笑みがこぼれ、思わずこちらも笑って楽しく授業ができる良い雰囲気が作られたように思います。しかし、最後の最後で4年2組のみんなと絆を深めることができたことが少し残念にも思い、早い段階から関わりを持つ機会があれば、もっと理解することが増えたのかもしれないと感じました。(中略)

今回は、私の得意分野である「ダンス」を主体とした表現活動の授業だったので、中学・高校時代に小学生を対象にダンスを教え、曲に合わせて一緒に踊るといった経験をした時のことを想起し、グループ活動をスムーズに進めていくことができました。また、グループごとに

決められた時間の中で小作品を作り、お互いの発表を見合うことにより、児童同士も刺激し合い、私たちも仲間がどう働きかけているのか、接しているのかを学んで取り入れることができました。私のグループの児童たちからは「楽しかった！」と感想が出てきたことを嬉しく思います。(中略)

2年次から保健体育の専門領域で学びますが、体育は身体を動かすことの楽しさ、喜びを体感できる科目です。体育の授業などは特に、一歩踏み違えると授業から遊びへと変換されがちな所があり、上手く導いて行くことが大切だと思います。

今度は、同じ授業を自分一人でも同じ人数の小学生を対象にできるかということが目標になります。将来のことを考えてチャレンジしてみたいです。また、自分の得意分野を追究していくのではなく、あまり自ら手を伸ばすことのない分野にも目を向けて、将来に繋がることを学んでいこうと思いました。

(T.S. 女子学生)

引用文献

- 中嶋俊夫 (2007) 「音楽的体験を共有する場づくりへのアプローチ—初等音楽科教育法授業における学生の取り組みと意識調査を通して—」『横浜国立大学教育人間科学部研究紀要 I』教育学 第9集 pp.119-137.
- 中嶋俊夫 (2013) 「表現活動を通して子どもを知る、子どもと関わる—イタリアの表現教育に学ぶ認知・情動・身体の連関—」『教育デザイン研究』(横浜国立大学教育人間科学部教育デザイン研究会) 第4号 pp.123-141.
- パークレイ E., P. クロス, C. メジャー (2009) 『協同学習の技法』(安永 悟 監訳) ナカニシヤ出版
- 本間道子 (2011) 『集団行動の心理学』サイエンス社